2025 年度 人材育成班 報告書
令和 7 年度 厚生労働科学研究費補助金 医療体制整備班（班長：佐々木毅）
【人材育成班 構成員】
責任者：眞杉 洋平 構成員：河原 明彦、鈴木 学、内藤 嘉紀、町田 知久

---

1. はじめに（班設立の背景と目的）

近年、国際分類に準拠した腫瘍病理診断において、遺伝子パネル検査をはじめとする多様な分子解析が必要不可欠となっている。本班は、病理診断を目的としたゲノム検査（パソロジカルシークエンス）を適切に運用できる高度な専門知識・技術を有する人材を持続的に育成し、全国的な適正配置を実現することを目的とする。具体的には、病理医および臨床検査技師を対象とした教育カリキュラムの構築、および既存の専門医・認定技師制度の最適化に向けた検討を行った。

2. 検討対象および連携団体

本班では、ゲノム医療を支える以下の専門職および職能団体を対象として活動を展開した。

- **2.1 対象：** 病理医、口腔病理医、および臨床検査技師
- **2.2 連携・協力団体：**
    - 一般社団法人 日本病理学会
    - 一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会（日臨技）
    - 適応疾患の拡大に合わせ、将来的に関連学会との連携を視野に入れる。

3. 主な討議内容と到達点

3.1. 病理医を対象とした教育体制の整備

病理専門医（約 2,900 名）および分子病理専門医（約 800 名）制度の有効活用を軸に、以下の 3 点を重点的に検討した。

1. **専門医研修カリキュラムへの導入** 病理専門医、口腔病理専門医、および分子病理専門医の各研修プログラムにおいて、パソロジカルシークエンスに関する具体的項目を組み込む。
2. **分子病理診断に関する講習会の活用** 日本病理学会が主催する各種講習会「病理専門医講習会」「ゲノム病理標準化講習会」「分子病理専門医更新講習会」、「分子病理診断講習会」等を通じて、最新のガイダンス（脳腫瘍、子宮体癌等）に基づいた分子病理診断の実装に必要な知識の普及を促進する。また、「分子病理診断講習会」で開始された、非会員への門戸開放についても継続的に検討する。
3. **指針・規定の最適化** 現行の「ゲノム診療用病理組織検体取扱い規程」を、より病理診断（パソロジカルシークエンス）の実務に即した内容へとアップデートする必要性を確認した。

3.2. 臨床検査技師を対象とした教育体制の整備

認定病理検査技師（約 1,700 名）制度を基盤とした教育機会の創出を検討した。

1. **既存講習会プログラムの再編** 日臨技主催の「指定講習会」「特定講習会」「スキルアップ研修会」等において、ゲノム検査に関連する実務（検体取扱い、核酸抽出、NGS 出庫管理、FISH 検査等）を標準コンテンツとして組み込むよう働きかけを行う必要がある。
2. **検体管理教育の重点化** NGS 解析が外注中心である現状を踏まえ、手技の習得のみならず、プレアナリティカル段階（検体固定、評価、精度管理）に関する座学教育の強化を優先事項としたい。

3.3. 資格および施設要件に関する検討（今後の課題課題）

パソロジカルシークエンスの質を全国的に担保するため、実施主体となる人材の資格要件および施設基準について、以下の点を今後の重要な検討課題として位置付けた。

1. **人材の資格要件の定義** 分子病理診断の実践には、病理学的な専門性に加え、ゲノム解析に関する高度なリテラシーが求められる。現時点では既存の「分子病理専門医」および「認定病理検査技師」を中核的な人材と想定しているが、パソロジカルシークエンスに特化した追加研修の必要性について、日本病理学会および日臨技と連携して議論を継続する。
2. **施設要件の標準化** 検査の精度管理を維持するため、パソロジカルシークエンスを実施・管理する施設が備えるべき設備、人員配置、および外部精度管理への参加状況等を踏まえた施設要件の必要性について議論を継続する。
3. **診療報酬等との整合性** 将来的な社会実装を見据え、上記の人材・施設要件が診療報酬体系や医療法上の位置付けとどのように整合するか、行政的な視点も含めた多角的な検討も必要である。

3.4. 病理医と臨床検査技師の連携強化（新規施策）

1. **「病理学会・日臨技合同ワーキンググループ（仮称）」の提案** 両団体の連携による合同 WG を設置し、共通の教育資材作成やシンポジウムの共同企画を行う体制構築を提案する。
2. **合同シンポジウムの定例開催** 日本病理学会総会および日本医学検査学会において、ゲノム医療・パソロジカルシークエンスを恒久的なテーマとした合同シンポジウムを交互に開催する体制を目指す。

4. 技術研修（ハンズオン）の展開案

知識の習得にとどまらず、実践的な技術向上を目指した段階的プログラム案を策定した。

- **段階別研修の設定：** 初級・中級・上級のレベル分けを行い、核酸抽出から FISH や PCR 等の技術まで、小人数制の演習を実施する。
- **地域プロトタイプの実施：** 福岡地域等をモデルケースとして、病理医と検査技師が

ともに参加する地域密着型ハンズオンセミナーを試行。全国展開に向けたロジスティクス上の課題を抽出する。

- **外部精度管理の導入：**外部機関と連携した全国的な精度管理体制の構築についても、技術研修の枠組みの中で検討を継続する。

5. まとめと今後の課題

病理医と臨床検査技師の教育カリキュラムの骨子を策定し、既存の専門医・認定技師制度の活用と最適化に向けた検討を行った。今後、策定した教育プログラムの試行運用等を進めるとともに、資格および施設要件に関する検討、病理医と臨床検査技師の連携強化、技術研修の展開といった課題に取り組む必要がある。